

非営利法人ニュース

2018年
7・8月合併号
Vol. 66



発行 公益総研 非営利法人総合研究所
東京都港区新橋6-7-9 新橋アイランドビル
TEL 03-5405-1811 / FAX 03-5405-1814
編集協力 (特非)国際ボランティア事業団・(公財)公益推進協会・NPO法人設立運営センター

★★★ お勧めセミナー情報 ★★★

【1】NPOが得か？社団が得か？法人設立セミナー

*どの法人格が向いているのか、メリットとデメリット・税制の違いなどを説明

- 講師 福島 達也
(田園調布学園大学講師・(特非)国際ボランティア事業団 理事長)
- 日時 2018年8月29日(水)
午後2:00~4:00(受付1:45~)
- 会場 東京都港区新橋6-7-9 新橋アイランドビル1階会議室
(新橋駅烏森口より徒歩8分・御成門駅より徒歩5分)
- 定員 先着8名まで 徹底指導(最少催行人数3名)
- 受講料 3,000円(1名分・税・テキスト代含む) *事前振込



◎情報満載！今月のもくじ◎

セミナー&助成金情報	1
非営利法人関連情報	2,3
CEOコラム	4
編集後記	4

★★ (公財)公益推進協会から助成金のお知らせ ★★

◎ J M 基金

□目的:こどもの心と体の健やかな成長を願い、子ども社会に格差ない「平等の機会」を支援することを目的に作られました。この基金では、そのような子供たちに無料で食事の提供をしている団体・個人に対して本基金では活動の支援を行います。

□助成対象:日本全国において食事支援活動を行う団体・個人で以下の要件を満たすもの。

- 1 こどもに対して無料の食事支援活動を行なっているもの
- 2 1年以上且つ、毎月1回以上の食事支援活動を約束できるもの
- 3 営利目的でない事業であること

□助成件数:2018年は10団体程度

□助成額:1団体あたり 30万円(上限) 補助率の制限はありません。

□応募手続き:応募用紙は、当財団ホームページ(<http://kosuikyo.com/>)よりダウンロードし、必要事項を記入した応募用紙と添付書類(事業計画、見積書及び予算書など)を郵送してください。

□募集期間:7月2日~8月31日(お早めにご応募ください!)

□選考方法・助成金の交付方法・助成決定者の義務等の詳細:当財団ホームページを参照。

問合せ先 (公財)公益推進協会 TEL03-5425-4201 担当:高野

☆セミナー&助成金申込方法☆

【1】NPOが得か？社団が得か？法人設立セミナー

→特定非営利活動法人
国際ボランティア事業団
TEL 03-5405-1813
FAX 03-5405-1814
メール npoinfo@iva.jp

■必要事項

- ①参加日
- ②参加者氏名
- ③団体名
- ④案内送付先郵便番号、住所
- ⑤電話
- ⑥ファックス
- ⑦メールアドレス

【2】助成金

応募用紙等郵送先
〒105-0004
東京都港区新橋6-7-9
新橋アイランドビル2階
(公財)公益推進協会
JM基金
担当 高野宛 以上

こんな補助金知ってますか？ 助成金申請は公益総研 丸山研究員におまかせあれ

前回に引き続き「IT導入補助金」をご紹介します。IT導入支援事業者によりあらかじめ事務局に登録されたITツールの導入に関する費用について補助してもらえらる補助金で、補助率は1/2、上限は50万円、下限は15万円です。第三回が「8月中旬」からスタートします。IT補助金は簡単に言えば「ウェブサイトの作成にかかった費用を補助金で半分返ってくる」などというものです。このIT補助金ですが今年が大盤振る舞いなので、今年はチャンスです。そのための加点申請があります。つまり下駄を履くのです。それが「おもてなし認証」「経営力向上計画」の二種類です。経営力向上計画は事業計画をローカルベンチマークに合わせて作っていくのですが、一人では大変なので、専門家である我々と共に実行力有る商品を開発するのが目的です。各企業がかかる現状は異なります。それを、認定支援機関である「行政書士 丸山」が支援し共に作成していくこととなります。この計画をもってIT補助金の申請を行いましょ。是非お気軽にお声かけください。

☆助成金申請のご相談先☆

公益総研株式会社
TEL 03-5405-1811
FAX 03-5405-1814
メール: souken@iva.jp
HP: <http://www.iva.jp/nposouken/>

★非常利法人関連情報★

神戸・新開地に40年ぶり演芸場

神戸市兵庫区の新開地商店街に上方落語の新たな演芸場「神戸新開地・喜楽館」が11日、誕生した。大小の劇場が集まり「東の浅草、西の新開地」と呼ばれていた往年のにぎわいを取り戻そうと、地元のNPO法人が運営する。大阪市の「天満天神祭享亭」に次ぐ上方落語協会の上席演芸場となる。同演芸場は2階建てで212席。こけら落とし公演では、桂文枝さんが「残りの落語家人生はここにすべて捧げたい」と話した。5日目までの公演は満席という。新開地での演芸場復活は40年ぶり。（日本経済新聞 7月11日）

母親らのNPOが絵本づくり

川崎市幸区で子育て中の母親らの交流の場づくりを目指すNPO法人「はたらくらす」が区役所と協働し、夢見ヶ崎動物公園（同区南加瀬一）の魅力発信する絵本づくりに取り組んでいる。地域の人たちと交流する中で地元の歴史などを広く伝えたいと考えたという。法人代表理事の石渡裕美さん（39）は、自宅近くに開業した複合施設「コートニアガーデン新川崎（北加瀬二）」に地域住民を講師として招き、女性向けワークショップなどを開いている。次男（8つ）の出産直前から区内で自主保育を運営してきた石渡さんにとって、施設に隣接し、動物公園がある加瀬山は、子どもたちと過ごす大切な場所。地域で清掃などのボランティア活動をするシニア世代の人たちと交流する中で「田んぼが広がる町から、工場や住宅の町になった歴史を知った」という。こうした地域の歩みや市民の類いのある動物公園の魅力を紹介したいと考え、絵本づくりを区に提案した。加瀬山にまつわるエピソードを一般から募集。これを参考にしながら、法人理事らでつくる製作委員会が物語を考える。本年度中に完成させ、保育所や児童施設に配布するほか、読み語り会を開く予定。（東京新聞 7月15日）

震災の絆、東北から愛南に物資

記録的豪雨が襲った県内被災地の助けに一。愛南町のNPO法人などの福祉関係者が14日、東北からの支援物資を受け取った。2011年3月の東日本大震災の被災地で支援に当たった町内の医療、福祉関係者らの育んだ絆が、東北からの恩返しにつながった。支援物資の手配を担ったのは、仙台市で障害者や高齢者福祉に携わるNPO法人「雲母（きらら）倶楽部」のメンバー。東日本大震災の際は、障害者就労支援などを行っている愛南町のNPO法人「ハートinハートなんぐん市場」のメンバーや、公益財団法人正光会などの病院関係者らが、1年以上にわたって代わる代わる東北に出向き、雲母倶楽部とともに被災者支援を続けた。なんぐん市場の中野良治マネジャー（42）によると9日、雲母倶楽部側から、支援の申し出があり、南予の各地区で断水が続き、給水に困っていると伝えた。東北からの支援物資を乗せたトラックは14日午後、なんぐん市場の事務所に到着。飲料水や非常食のほか、水を入れるタンク220個や、水道管に直結させなくても使える二層式洗濯機5台が届いた。仙台市から1400キロ以上の距離を同僚と2人で走ってきた秋月郁夫さん（70）は「震災の時は多くの支援もらった。愛媛とは伊達藩のつながりもある。困ったときは助け合いたい」と笑顔を見せた。物資は正光会の職員や住民有志が15日以降、宇和島市三間、吉田地区を中心に順次届ける。タンクは市からの情報を基に、水が不足している介護・福祉施設などにも設置し、愛南漁協の活魚車を活用した給水も行う予定。なんぐん市場の吉田良香理事長は「人の縁の大切さを感じ、本当にありがたい。豪雨の被災者の助けになれば」と話している。（愛媛新聞 7月15日）

秋田で一番小さな村、手づくり芸術祭

「かみこあにプロジェクト」は「大地の芸術祭 越後妻有アート・トリエンナーレ2012」の飛び地開催としてスタートし、上小阿仁村の村人を中心に、秋田公立美術大学などが協力して毎年8月～9月にかけて開催される手づくりの芸術祭。村人と秋田公立美術大学の学生・助手らが協力し、芸術祭の企画、会場の清掃などの準備作業や期間中の運営にあたっている。7回目を迎える今年は、八木沢会場、沖田面会場、小沢田会場の村内の3つのエリアにおいて、番楽などの伝統芸能競演や棚田を舞台にした野外音楽イベント、廃校した小学校の音楽室でのライブパフォーマンスの他、県内外のアーティスト24組による現代アート作品の展示やワークショップが行われる。（産経新聞 7月14日）

知的障害者に「うそつき・泥棒」虐待

津市の障害者施設で、複数の職員が知的障害があるデイスアービスの利用者に対し、暴言を浴びせるなどの虐待をしていたことが施設を運営する団体への取材で分かった。三重県は複数回こわたって身体的・精神的虐待があったと判断し、障害者総合支援法に基づき、運営する団体に再発防止を求めた。施設は2日夜、利用者や家族らへの説明会を開き、問題の経緯などを説明し、謝罪したという。施設は、津市のNPO法人「おもいやり介護の会つくしんぼ」が、津市一志町庄村で運営する「つくしんぼの家一志」。自閉症などの利用者がデイスアービスに訪れており、県によると、今年2月までには複数の利用者に対し複数回の虐待が確認された。けがはなかった。団体側は虐待を受けた利用者は20代の男女で、虐待を行ったのは30代と40代の女性職員と明かした。（朝日新聞 7月3日）

一石三鳥「防災観光ふるしき」学生NPO

木造家屋が密集する墨田区北部地域で、共に災害に強いまちづくりに取り組む学生ボランティアグループ、NPOが「防災観光ふるしき」を作った。日常生活に使い、プリントされた地図で避難場所、地域の名所が分かる「一石三鳥」の優れたもの。地元の区立第一寺島小学校で6月、非常時の活用法を児童に伝える防災特別授業の第1弾が行われた。開発したのは芝浦工業大生でつくる「すみだの巣ぐりプロジェクト」と、NPO法人「燃えない壊れないまち・すみだ支援隊」。水をはじく撥水性で色のベースが青色と、燃えにくい防災性で赤色の二種類。いずれも、縦、横70センチの大きさだ。防災関連では、指定避難所、給水ステーションなどの場所を示し、大雨で荒川が氾濫した際の浸水の深さを「5m以上」など四段階で表示。観光面では、隅田川花火大会の2カ所の打ち上げ場所や桜の名所、ミニ博物館などを記した。区中かりの浮世絵師、葛飾北斎が庶民の暮らしなどを描いた「北斎漫画」がモチーフのイラストをあしらひ、親しみやすく仕上げた。芝浦工大の学生が同区の木造住宅密集地域を研究テーマにした縁から、両団体共防災講座など連携して実施。その中で区の配布した防災マップを住民が活用しきれていないのではと感じ、突然の災害に備えて普段から持ち歩けるふるしきに着目した。今後、小学生向け特別授業や事業所向けの防災講座などで、両団体はふるしきを教材として役立ていく。学生グループ代表の三年生渡部雄貴さん（20）は「ふるしきの地図は専門家に話を聞き何度も修正して完成させた。災害があったときに役立つ」とアピールしている。（東京新聞 7月8日）



＊内容に関しては、問合せ先に直接問合せをお願いします

間仕切りでプライバシーを 避難所で

甚大な浸水被害で約370人が避難している岡山県倉敷市真備町地区の市立岡田小学校で15日、避難者のプライバシーを確保するため、NPO法人のメンバーらが間仕切りを設置した。約2メートルの紙筒で枠組みを作って布を掛ける。NPO法人ボランティア・アーキテツ・ネットワーク（東京・世田谷）のスタッフや学生ボランティアら約30人が3時間かけて作業した。自宅が全壊した主婦（45）は「隣から見えなくなり、気兼ねなく家族との時間を過ごせる」と笑みを浮かべた。妻と避難生活を送る森脇誠さん（77）も「プライバシーがない生活でストレスが心配だったのでありがたい」と話した。同NPOは既に別の避難所でも間仕切りを設置しており、さらに拡大していくという。（日本経済新聞 7月15日）

西日本豪雨、東峰と朝倉が恩返し支援

西日本豪雨の被災地を支援ようと、各地で支援の動きが広がっている。自治体職員の派遣や救援物資の輸送、現地で活動するボランティアの募集など、さまざまな形で被災者の生活を手助けする。昨年7月の九州北部豪雨で被災した福岡県東峰村は13日、西日本豪雨で被害を受けた愛媛県上島町に飲料水を送り届けた。両自治体は、NPO法人「日本で最も美しい村」連合（事務局・東京）に加盟。村は昨夏の豪雨後、同町から義援金を受けた。今回の豪雨で町内が断水となり、NPOを通じて飲料水の要請を受けたという。昨夏の豪雨の際、500mlペットボトルの水が被災者に喜ばれたことから、村は同じサイズを計1200本購入。12日に村役場で出発式が行われ、職員が公用のトラックで出発した。渋谷専科村長は「私たちが受けた恩を、上島町におくりたい」と話した。朝倉市は13日、大きな被害を受けた岡山県総社市を支援するため、職員2人を派遣した。朝倉市によると、昨夏の豪雨の際、総社市は職員らを派遣し、避難所で使う大型扇風機や掃除機なども送ってくれたという。朝倉市は防災担当だった職員らを16日まで派遣し、避難所の運営などを手伝う。市人事秘書課は「昨夏の災害対応の経験を生かして手助けし、恩返しをしたい」としている。（読売新聞 7月14日）

屋上でニンジン作り 保育園児種まき

東急プラザ表参道原宿（渋谷区神宮前4）6階屋上テラス・おもはらの森の畑「やさいの森」で7月10日、ニンジンの種まきが行われた。都会のビル屋上や有休物件などを畑や田んぼとして活用する「都市型農乐的ライフスタイル」を提案するNPO法人アーバン・ファーマーズ・クラブ（恵比寿4）が運営する同所は、4月に2m四方のプランター4基を設置し野菜作りを始めた。子どもの食育や企業間のコミュニケーション、地域の人たちとの交流など「育み」をコンセプトに運営する。第2弾となる今回は、伊藤園が新たに立ち上げる「渋谷産ニンジンジュース」プロジェクトとしてニンジンの栽培を始める。育てるのは、同社専用の品種として15年ほど前から野菜飲料「充実野菜」に使うなどしている「朱衣（しゅい）」と白や紫などのカラーニンジン。この日も3園の園児約60人を招いた。園児たちは「カラーニンジンなのに種は黒い」と驚きの声を上げながら、ニンジンの種をまいていた。同社の社員は、ニンジンに関する食育講座も行った。ニンジンは発芽させるのが難しいといい、最初の水をまきが以降は雨水のみで育てる予定。同NPOメンバーが週2～3日足を運びながら育て、8月には再び園児を招いて間引きを行う。11月に4社合同で開く収穫祭で、ニンジンの収穫、ニンジンジュース作りなどを予定する。（シブヤ経済新聞 7月10日）

西日本豪雨の不明者、救助犬で捜索

西日本豪雨の被災地で、和歌山県新宮市のNPO「和歌山災害救助犬協会」が安否不明者の捜索に取り組んだ。被災地から戻った榎本義清理事長（56）が12日、取材に対し、7年前の紀伊半島大水害と同様の被災状況だと感じたことや、発生が懸念される南海トラフ巨大地震にも通じる広域的な災害に危機感を持ったと説明。復旧について「オールジャパンで支援を」と呼び掛けた。協会は家屋倒壊や土砂崩れなどで安否不明になった被災者を鋭い嗅覚で捜し当てる災害救助犬を育て、災害現場に出動している。会員は12人で、災害救助犬はシェパードとラブラドルレトリバーの計9匹。これまでに紀伊半島大水害や東日本大震災などの被災地に出掛けており、今回で5回目の出動という。西日本豪雨では、現地の消防からの要請を受けたNPO「災害救助犬ネットワーク」から協力を求められ、榎本理事長とメンバーの瀧本美鈴さん（太地町）が10日午後、救助犬2匹ともに広島県呉市に向けて出動。11日午前6時半から、土石流などで大きな被害を受けた同市安浦町市原地区で、他団体のメンバーや犬と一緒に捜索活動に取り組んだ。（紀伊日報 7月13日）

NPOの杜 高校生の夏ボラ体験

毎年、高校生に「夏休みの3日間、NPOでボランティア体験をしませんか？」と呼び掛けているのは、認定NPO法人杜の伝言板ゆるる。地域でさまざまな活動を展開しているNPOの現場を体験して、地域の問題に気付いてもらおうと16年前から続けている。終了後に送ってもらう体験記には、「自分には祖父母がいないので話せるか心配だったけど、デイスアービスのおばあちゃんとうまく話せた」「一人で参加したので不安だったが、一緒に体験した他校の高校生と友達になった」など新たな一歩が見られます。「子どもはかゆいので幼児の遊び場で体験したけれど、やってみて自分には子どもを相手にする仕事は向いていないようだ分かりました」「障がい者の役に立ちたいと思っていたので、知的障がい者が働く場でボランティアをし、やっぱりこの仕事を選びたいと思いました」という気付きは、進路にも及ぶ。中には、「ゆっくりでも経験を積みばちゃんとし事ができるのに、なんで障がい者の就職の場がないんだろう」という社会課題に気付く高校生もいる。（河北新報 7月9日）

自殺悩み、LINEで相談を

京都府城陽市の若年者自殺予防事業として、悩みのある人やその家族らからの電話相談を受け付けているNPO法人が本年度、無料通話アプリ「LINE」の通話機能を使った相談を始めた。提案した渡辺明夏さん（33）は「『友だち』になれずくに通話できる。身近なスマホアプリを使うことで、若い人が相談しやすい環境を整えたい」と話す。法人は、同市で障害のある人たちの就労を支援する「で・らいと」。2010年度から市の電話相談事業「グリーンコール」を行っている。LINE活用のきっかけは、神奈川県相模市のアパートで9人の切断遺体が見つかった昨年の事件。殺人などの疑いで逮捕された男は、ツイッターなどSNS（会員制交流サイト）で自殺願望をほのめかず書き込みをした被害者に近づき、誘い出していた。渡辺さんはい「SNSでしか心の内を明かせない事情があったと思う。SNSへの書き込みを規制するのではなく、その声を少しでもすくい取れればよかった」と話す。相談事業は本年度から「グリーンコールプラス」と名を変え、毎週月曜の午後5～8時に受け付けている。今年4～6月は計16件の相談があり、うちLINEでの相談は14件。一方、アカウントの「友だち」登録者は23人と、相談件数を上回っている。今後は、LINEで心の健康を保つ方法や身近な人の異変に気付くポイントなどを文字で発信する予定だ。（京都新聞 7月9日）

千葉市、里親制度でNPOに業務委託

千葉市は虐待などの事情で保護者とともに暮らすことができない子どもを育てる「里親制度」の業務の一部を民間委託する。里親支援のノウハウを持つNPO法人と協働し、里親になる人を探し出したり、里親になった人への研修を手掛けたりする。子どもと里親家庭のマッチングも行う。委託期間は7月1日から来年3月31日まで。2018年度の委託費は2000万円。各地で養育里親の支援に取り組むNPO法人「キーンアセット」（大阪府東大阪市）に委託する。里親となることを希望する家庭と面談し、里親としての適性を見極めるほか、里親の相談に個別に対応する。千葉市には18年3月末時点で、保護者と暮らせる、社会的養育を必要とする子どもが約170人いる。このうち、里親のもとで生活することもは3割ことどまる。市は児童相談所の体制強化を図っており、18年度から常勤職員と非常勤職員をそれぞれ1人増員したが、対応が必要な事例は増えている。市は今回の委託事業で、児童相談所の業務を一部軽減する効果も見込む。（日本経済新聞 6月29日）

古民家を温かく子どもを迎える場に

地域の子供を見守り支える場を造ろうと、古民家を改修した拠点施設「りっぶキッチン永和町（仮称）」が大和高田市中部にオープンした。子供の貧困対策などに取り組む東京の認定NPO法人「Living in Peace」が整備。木のぬくもりを感じさせる造りで、メンバーは「地域の人と有効活用していきたい」と意気込む。施設は築約100年の日本家屋で、40年以上空き家になっていた。NPOが建物を借り上げ、2月から大規模な改修を実施。柱は傾き、シロアリに食われた跡もあったが、室内に頑丈な立方体型木造シェルターを入れたりして安全性・耐震性を確保した。先月18日の大阪北部地震でもびくともしなかったという。施設は当面、地域の子供に「食事を振る舞う「こども食堂」として月1回程度の利用が決まっている。経済的に厳しい家庭の子を支え、子供の孤食を防ぐ狙い。今後、子供を支える活動に広く開放していく方針だ。（毎日新聞 7月13日）

空き家活用して「高校生民宿」

浜松市天竜区水窪町の活性化に協力する静岡県立藤枝北高の生徒が、同町の空き家を活用した民宿の開業を計画している。コンセプトは「食」と「体験」。プレ宿泊も実施し、2019年の民宿開業を目指す。生徒らは「誘客と地域振興につなげたい」と意気込む。取り組むのは食品サイエンス部の約10人。同部は水窪町の天然麹（こうじ）菌を利用した雑穀発酵調味料、雑穀麹甘酒を開発した。昨年は開発品を使った食事や麦みそ仕込みと甘酒づくり体験などのツアーを実施した。民宿はNPO法人「こいねみさくほ」が管理する同町奥領家の築約35年の空き家を活用。管理経営はNPOが担当。同部は主に民宿の仕組みづくりや広報を手掛ける。「食」は発酵と雑穀、ジビエの3本柱。開発品を使った食事をはじめ、利用者が自炊する際にはタブレット端末でジビエ料理などの作り方を紹介し、地元スーパーが食材を届ける。「体験」は溪流釣りやマタギ体験、歴史講話など約15種を予定。趣味や特技を持った住民に講師を依頼した。プレ宿泊では移住コーディネーターや生徒の家族ら5人を招待。雑穀料理、古道散策などを体験した宿泊者からは「ウグイスの声で起床するのはすてき」と好評を得た。一方で「体験場所の地図作成など丁寧な準備や地域の助けが必要」との意見も。料金設定や改装、備品調達、広報資料作成、各種手続きなど課題は山積みで、NPOの中政俊理事長（62）は「他の空き家で一緒にできるかも検討する。開業後も課題は出るだろうが啓蒙につなげたい」と話す。（静岡新聞 7月13日）



茨城NPO、水害時手引をHPに

2015年9月の関東・東北豪雨の被災者支援を続ける「茨城NPOセンター・コモンズ」（水戸市）が、西日本豪雨を受け、水害時の後片付けや被災地生活の要点をまとめた手引をホームページで公開した。水の確保や家具撤出、不要品廃棄、家の再建などに関し体験談や交え具體的に記載。経験と教訓を伝えるのが狙いだ。関東・東北豪雨は宮城、茨城、栃木の3県で8人が死亡。茨城県常総市で鬼怒川堤防が決壊し、同市の約3分の1が浸水した。手引は「豪雨災害に備えるガイドブック」。大雨発生から避難、生活再建までを時系列に沿ひ、取るべき対応を「やることリスト」として列挙した。（東奥日報 7月13日）

タイの学生に奨学金 里親事業23年

タイの学生に奨学金を贈る活動に取り組む基山町のNPO「慧燈（えとう）」（副社長理事長）のメンバーらが同国を訪れ、中高生ら193人に奨学金を伝達した。1995年から毎年続けている活動で、副理事長は「タイは純粋な子どもが多い。一生懸命勉強してほしい」と期待する。同NPOははもとも、第2次世界大戦の「インパール作戦」で敗退し、タイ北部で亡くなった日本兵の遺骨収集活動に取り組んでいた。83年にチェンマイ県にあるバンガード学校の敷地内に「タイ・ビルマ方面戦病死者追悼之碑」を建立。碑を守ってくれる同校の生徒に感謝の気持ちを込めて奨学金支給を始めた。今年も同校のほか、チェンマイ県、メーホンソソンの中学、高校、農業専門学校合わせて4校の生徒に奨学金を贈った。奨学金は里親12人と里子支援者19人の計141人が提供。副理事長や里親ら12人が同校など3カ所を訪れ、調理を手渡した。伝達式では生徒一人一人に奨学金を贈った後、里親と里子が交流。生徒たちは日常生活の様子や家族のこと、勉強のことなどを里親に報告し、「日本に行きたい」と夢を語った。里親らは生徒の話に興味深そうに聞き入り、継続的な支援への思いを新たにした。（佐賀新聞 7月14日）

寺の供物お裾分け、困窮家庭支援

寺に寄せられた供え物をお裾分けし、経済的に困窮する家庭を支援するNPO法人「おてらおやつクラブ」（事務局・奈良県）の活動を広げようと、福井県福井市徒俣町の浄善寺は7月3日、説明会を開いた。同寺衆徒の朝倉恒憲さん（42）は「福井は全国的にも特に寺院が多い。県内で賛同者が増えれば全国の家庭を支援できるようになるかもしれない」と期待を込めた。活動は奈良県の住職が発起人となり、2014年に始まった。全国に広がり、3日時点で874寺院が参加、364団体や支援している。昨年8月にはNPO法人「おてらおやつクラブ」が発足した。福井県内での説明会も16年の長慶寺（越前市）に続いて2回目。県内の14寺院に登録している。説明会には県内の寺院などから約20人が参加。同NPO事務局長の桂津薫さん（40）が「地域との交流が増えることもメリット。年1回のお裾分けでも構わない」と活動内容を説明した。続いてお供え物お菓子や段ボール箱に詰め合わせた。朝倉さんは2年前の説明会に参加し登録。活動を紹介したところ地域住民の関心が高まり、朝倉さんが貧困問題について伝えることができた、住民がお供え物を届けてくれたりすることがあるという。現在は児童養護施設や子ども食堂にご裾分けをしている。越前市の児童養護施設「一陽」の管理栄養士、吉田菜々子さん（29）は「子どもに毎日のおやつを途切れず提供できて大変助かっている」。日蓮宗福井県中部青年会のメンバーで、越前市の妙智寺の坂井是真住職（44）は「活動に賛同し青年会として動いていければ」と話していた。朝倉さんは「活動を通じていろんな絆が広がる。お寺が地域のコミュニティの場として、人が集まる場所になることは大事。寺同士の間につながりが生まれることも期待したい」と活動の拡大を見据えた。（福井新聞 7月4日）



公益総研株式会社 首席研究員兼CEO
公益財団法人公益推進協会 代表理事
(特非)国際ボランティア事業団 理事長 福島 達也

2月号のこのコラムで、オリンピックでのスピードスケートの小平選手のことを、「日本人の奥ゆかしさが素晴らしい」として皆様に感動をお伝えしたのは今から5か月前のことである。開催地・韓国の国民的英雄である李相花（イサンファ）選手の「五輪3連覇」が未完に終わった瞬間、金メダルが確定した小平選手が韓国国旗（太極旗）を手にしながら泣きじゃくる李の姿を見つけ、李選手のそばにそっと近づき、なんと彼女を労わるような表情でギュッと李選手を抱きしめたあのシーンである。「日本人でよかった！」と誰もが思った瞬間であった。

が、しかし、今回はその全く逆のことが起こったのである。

そうそれは、今回のサッカーのワールドカップ大会の日本対ポーランド戦である。この試合で勝つか引き分ければ、日本は悲願の決勝進出というあの試合だ。夜遅くではあったが夜中ではないため、日本人であれば大人も子どももみなテレビの前に釘付けだったことだろう。しかし、この試合で事件は起こった。

セットプレーから失点した日本が1点を追っていた80分過ぎ、他会場ではコロンビアが先制し、そのまま試合が終了すれば、セネガルとフェアプレーポイントの差で日本は2位通過が可能とわかった瞬間である。なんと残り10分以上もあるというのに、監督からの指示によって、日本は自陣でゆっくりとボールを回し、まったく攻撃に出ることはせず、0-1でわざと負けたのである。結局、コロンビアがセネガルを下したため、決勝トーナメント進出を果たした日本だったが、試合終盤のリアリスティックとも言える振る舞いには、世界中から非難の声が殺到した。

この大会はここまで、日本の戦いは本当に素晴らしかったと思う。しかし、このラスト10分の展開は全くもって恥ずかしいし、W杯では見たくない茶番劇だったから、多くの子どもたちには絶対に見せたくなかったし、マネしてほしくない光景だった。日本人であることが恥ずかしいと思った瞬間である。

もちろん、悲願の決勝トーナメント進出という結果を追い求めたなかでの、究極の選択だったし、それで現実決勝トーナメントでは、負けたとはいえ強敵のベルギーに善戦したことを思えば、それはそれで評価できるのかもしれない。そして、なぜか日本のマスコミもそれほど批判していない。だが、お隣の国の話ではなくサムライ（武士）をイメージにしている日本がこうしたアンフェアなプレーを行うというのはいかがなものだろうか？

勝てば官軍とばかり、サッカーファンはそれほど重視していないようだが、私は嫌だ。

サッカーばかりではない。プロ野球でも、終盤になると必ず問題になるのが首位打者争いだ。

ある選手が最後の方で打率を上げ首位に躍り出ると、必ずそのあとの試合を休む（または守備のみ）という行為がよくある。このような行為は日本のプロ野球では昔から行われていて、これは当然のこととして行われており、それほど物議をかもしてはいない。しかし、一方、アメリカ大リーグに目を転じると、全く逆の現象が生じているようである。上記のような日本のプロ野球のごとき行為にはまずお目にかからないし、このような行為はフェアプレー精神に反し恥ずべきものとされている。かの昔、テッドウィリアムス選手が1試合を残して4割ジャストをマークしていた時、監督がその試合を休むことを進言したが、テッドウィリアムス選手は敢然として出場し、多くの安打を放ってさらに打率をあげ、最終打率を4割6厘としたことなど、外国の方がよっぽど潔いサムライ魂という感じだ。

これらのフェアプレー精神やその根本である文化は、それぞれ人種の相違、各国の歴史、宗教などの相違に起因しており、このこと自体は各国、各国民の個性の現れであり、尊重すべき事項ではある。しかしながら、国際化（グローバリゼーション）はますます進み、国家間の垣根が低くなってきて国際交流が進展する中、外国での評価や常識にも目を向けないといけないと思う。それなのに、勝つためには手段を採ばないという手法が蔓延しているのが気になる。

なぜだろう？ そうだ、その原因は日本の政治だ！ 前回の総選挙を思い出してほしい。

民進党が離党騒ぎでドタバタだし、小池新党はまだ候補者もほとんど決まっていなほど準備不足だった。その上、北のおぼっちゃま君がミサイルを発射し続け、核実験をすればするほど、国民は右翼的な傾向が強まっていたあの時期。

さらに、モリ・カケ問題で窮地に追い込まれ、支持率が急降下してしまった自民党が、勝てるとしたら今しかないとはばかりに、全くの大義名分もなく、突然解散総選挙をしてしまった、あの安倍ちゃんの暴挙のことだ。勝てば手法は選ばないというのは政治家がそのお手本だったのである。情けない・・・さらに、不正を隠し続ける経済界も同じ穴のムジナだ！ 政治・経済・スポーツ、どうしてこうなっちゃったのであろう・・・

魯迅の言葉に「打落水狗（水に落ちた犬を打つ）」がある。これは、既に打ち負かされたがまだ降参していない悪人を更に追い打ちをかけてやっつける・・・という意味で政治家や経済界では大変評価されている言葉だが、勝つためには手段を選ばない「勝てば官軍」という風潮は、このころからあるのかもしれない。

だが、我々非営利分野で生きる者は、絶対に「溺れた犬は助けて保護する（困った人に手を差し伸べる）」。それが本当のフェアプレーなのだ。今回の西日本を襲った大雨の被害者の方のご冥福を祈りつつ、特にその意味をかみしめたいと思う。

編集後記

最近、知人が乗馬を始めたので見学に行ってきました。なかなか思い通りに動いてくれないことも多く苦戦しているように見えたのですが、徐々に指示を聞いてくれるようになるのが嬉しいとの事でした。私の方は高いところが苦手なので乗馬ができなくて残念ですが、エサをあげたり、自由に触ってもよかったので、それだけでも十分楽しめましたし、日々の疲れが癒されました。ホースセラピーの効果を感ずることができた1日でした。

(たま)